へ
2378
328

遠13特
2378
328

天竺徳兵衛韓噺

全四冊

上の巻

夷福亭主人綴
一勇齋國芳画

天保四年
癸巳孟春
芝神明前 丸屋甚八板

天竺徳兵衛韓噺

夷福亭緞　全四冊

國芳畫　下の巻

天保四癸巳初春　圓壽堂　丸屋甚八版

書肆来て僕に曰いはく羊音羽屋が四ツ屋怪談の劇場と取へ沢に合巻に出板せしふ彼狂言も余徳ある倶に大當りし故今年も昨の狂言と有形緞よりと例の性急安請合ヲヤット兼知れ幕あれどおかぶ乃朝霧と十切とく芝居へ行べしそれ大詰も立ざる大入丹もきのやうあい客へごろんとふを是非ひと這入ども木下りあるゝ船トゆうんて隣るいやう遠き桟敷ふ居りて向ふと見るべ人のごとくめく山彦よイヨ大和く音くとの声そるうた聞へるぞろ折ふいどぎんきいれ哀トらえど其の前きこえもヴァラ怪やと言へど其へ跡通ぜどのふつで此場へ来こ何れ子細で殺されとふ筋さらふ解せざるこども何分草稿立僅足ふ筆とこりく夜長の方燈緞させてふ鳴虫ふ音と合せる蚯蚓書座頭の徳市責人蛇蛙のごとく水仕合ト大ふ鯰ぞ御評判とひとつよ願ふ支ちろ程

天保三辰八月下旬二盃夜草稿　春窠軒隠士

同四歳癸巳　初春　戯作　福山人戯述

佐々木の家臣
将野四郎次郎元信
天竺徳兵衛
実ハ大日九
野宿の里れ契情遠山
実ハ世継瀬平娘
おろく

土弓
残玄
いろも
貝屋
引がる
天ぐくまでも
ぐく音ね
瀬一郎
実世又平

鹿
観

山
時
銀

観

徳

元
瀬

かさ祢いづく

重井作同

天七く
つき
累
伊

十七
助

十八

小

夷福亭主人戯綴

一勇齋國芳圖画